

1月29日に日本野球規則委員会より、2018年度の野球規則改正が発表されました。

今回の規則改正では、いわゆる“二段モーション”を反則投球とすることを定めた定義38の【注】が削除されました。また、昨年MLBで採用された故意四球の申告制も採用となるなどの改正が行われています。

委員会では「国内球界全体として取り組むべき課題」として、ダッグアウト前での投手らのキャッチボールの禁止と、捕球時の捕手がミットを動かさないことを引き続き呼びかけていくことも決めました。プロ・アマを通じた提言で、東京五輪までの浸透を目指していきます。また、社会人、大学野球で採用している延長回での「タイブレーク」の実施方法も、「国際基準」に合わせ、従来の「1死満塁・選択打順」制から「無死一、二塁・継続打順」制に変更することを確認しました。

発表された内容は以下のとおりで、赤く表示した部分が改正された内容です。

現 行				改 正 後			
<p>3.01 ボール</p> <p>ボールはコルク、ゴムまたはこれに類する材料の小さい芯に糸を巻き付け、白色の馬皮又は牛皮 2 辺でこれを包み、頑丈に縫い合わせて作る。重量は 5 ㇿないし 5¹/₄ㇿ(141.7 グラ～148.8 グラ)、周囲は 9 ㇿないし 9¹/₄ㇿ(22.9 ㇿ～23.5 ㇿ)とする。</p> <p>【注1】 我が国では牛皮のものを用いる。</p> <p>【軟式注】 軟式野球ボールは、外周はゴム製で、A号、B号、C号、D号、H号の 5 種類がある。A号は一般用、B、C、D号は少年用のいずれも中空ボールで、H号は一般用の充填物の入ったボールである。</p> <p>ボールの標準は次のとおりである。(反発は 150 ㇿの高さから大理石板に落として測る)</p>				<p>3.01 ボール</p> <p>ボールはコルク、ゴムまたはこれに類する材料の小さい芯に糸を巻き付け、白色の馬皮又は牛皮 2 辺でこれを包み、頑丈に縫い合わせて作る。重量は 5 ㇿないし 5¹/₄ㇿ(141.7 グラ～148.8 グラ)、周囲は 9 ㇿないし 9¹/₄ㇿ(22.9 ㇿ～23.5 ㇿ)とする。</p> <p>【注1】 我が国では牛皮のものを用いる。</p> <p>【軟式注】 軟式野球ボールは、外周はゴム製で、M号、B号、C号、D号、H号の 5 種類がある。M号は一般用、B、C、D号は少年用のいずれも中空ボールで、H号は一般用の充填物の入ったボールである。</p> <p>ボールの標準は次のとおりである。(反発は 150 ㇿの高さから大理石板に落として測る) M号の 20%圧縮荷重は、ボール直径を 20%つぶしたときの力を測る。</p>			
	直径	重量	反発		直径	重量	反発
A号	71.5 ㇿ～72.5 ㇿ	134.2 グラ～137.8 グラ	85.0 ㇿ～105.0 ㇿ	M号	71.5 ㇿ～72.5 ㇿ	136.2 グラ～139.8 グラ	70.0 ㇿ～ 90.0 ㇿ 20%圧縮荷重 32 ㇿ～40 ㇿ
B号	69.5 ㇿ～70.5 ㇿ	133.2 グラ～136.8 グラ	80.0 ㇿ～100.0 ㇿ	B号	69.5 ㇿ～70.5 ㇿ	133.2 グラ～136.8 グラ	80.0 ㇿ～100.0 ㇿ
C号	67.5 ㇿ～68.5 ㇿ	126.2 グラ～129.8 グラ	65.0 ㇿ～ 85.0 ㇿ	C号	67.5 ㇿ～68.5 ㇿ	126.2 グラ～129.8 グラ	65.0 ㇿ～ 85.0 ㇿ
D号	64.0 ㇿ～65.0 ㇿ	105.0 グラ～110.0 グラ	65.0 ㇿ～ 85.0 ㇿ	D号	64.0 ㇿ～65.0 ㇿ	105.0 グラ～110.0 グラ	65.0 ㇿ～ 85.0 ㇿ
H号	71.5 ㇿ～72.5 ㇿ	141.2 グラ～148.8 グラ	50.0 ㇿ～ 70.0 ㇿ	H号	71.5 ㇿ～72.5 ㇿ	141.2 グラ～148.8 グラ	50.0 ㇿ～ 70.0 ㇿ

<p>3.10 競技場内からの用具の除去</p> <p>攻撃側プレーヤーは、自チームの攻撃中には、グラブ、その他の用具を競技場内からダッグアウトに持ち帰らなければならない。フェア地域とファウル地域とを問わず、競技場内には何物も残しておいてはならない。</p>	<p>3.10 競技場内の用具</p> <p>(a) 攻撃側プレーヤーは、自チームの攻撃中には、グラブ、その他の用具を競技場内からダッグアウトに持ち帰らなければならない。フェア地域とファウル地域とを問わず、競技場内には何物も残しておいてはならない。</p> <p>(b) シフトを取るために、野手の守備位置を示す、いかなる印も競技場内につけてはならない。</p>
<p>5.03 ベースコーチ</p> <p>(b) ベースコーチは、各チーム特に指定された 2 人に限られ、次のことを守らなければならない。</p> <p>(1) そのチームのユニフォームを着ること。</p> <p>(2) 常にコーチスボックス内に留まること。</p> <p>【ペナルティ】 審判員は本項に違反した者を試合から除き、競技場から退かせる。</p> <p>【5.03 原注】</p> <p>ここ数年、ほとんどのコーチが片足をコーチスボックスの外に出したり、ラインをまたいで立ったり、コーチスボックスのラインの外側に僅かに出ていることは、ありふれたことになっているが、コーチは、打球が自分を通すまで、コーチスボックスを出て本塁寄り及びフェア地域寄りに立ってはならない。ただし、相手チームの監督が異議を申し出ない限り、コーチスボックスの外に出ているものとはみなされない。しかし、相手チーム監督の異議申し出があったら、審判員は規則を厳しく適用し、両チームのコーチがすべて常にコーチスボックス内にとどまることを要求しなければならない。</p> <p>コーチがプレーヤーに「滑れ」「進め」「戻れ」とシグナルを送るために、コーチスボックスを離れて、自分の受け持ちのベースで指図することもありふれたことになっている。このような行為はプレイを妨げない限り許される。</p> <p>ベースコーチは、用具の交換を除き、走者の身体に触れてはならない。</p> <p>【注 1】 監督が指定されたコーチに代わって、ベースコーチとなることは差し支えない。</p> <p>【注 2】 アマチュア野球では、ベースコーチを必ずしも特定の 2 人に限る必</p>	<p>5.03 ベースコーチ</p> <p>(b) ベースコーチは、各チーム特に指定された 2 人に限られ、そのチームのユニフォームを着なければならない。</p> <p>(c) ベースコーチは、本規則に従いコーチスボックス内にとどまらなければならない。ただし、コーチが、プレーヤーに「滑れ」「進め」「戻れ」とシグナルを送るために、コーチスボックスを離れて、自分の受け持ちのベースで指示することは、プレイを妨げない限り許される。ベースコーチは、用具の交換を除き、特にサイン交換がなされている場合などには、走者の身体に触れてはならない。</p> <p>【ペナルティ】 コーチは、打球が自分を通すまで、コーチスボックスを出て、本塁寄りおよびフェア地域寄りに立ってはならない。相手チーム監督の異議申し出があったら、審判員は、規則を厳しく適用しなければならない。審判員は、そのコーチに警告を発し、コーチスボックスに戻るよう指示しなければならない。警告にもかかわらず、コーチスボックスに戻らなければ、そのコーチは試合から除かれる。加えて、リーグ会長が制裁を科す対象となる。</p> <p>【注 1】 監督が指定されたコーチに代わって、ベースコーチとなることは差し支えない。</p> <p>【注 2】 アマチュア野球では、ベースコーチを必ずしも特定の 2 人に限る必</p>

<p>要はない。</p> <p>【注 3】コーチがプレイの妨げにならない範囲で、コーチスボックスを離れて指図することは許されるが、例えば、三塁コーチが本塁付近にまで来て、得点しようとする走者に対して、「滑れ」とシグナルを送るようなことは許されない。</p>	<p>要はない。</p> <p>【注 3】コーチがプレイの妨げにならない範囲で、コーチスボックスを離れて指図することは許されるが、例えば、三塁コーチが本塁付近にまで来て、得点しようとする走者に対して、「滑れ」とシグナルを送るようなことは許されない。</p>
<p>5.04 打者 (b) 打者の義務</p> <p>(2) 打者は、投手がセットポジションをとるか、またはwindアップを始めた場合には、バッターボックスの外に出たり、打撃姿勢をやめることは許されない。</p> <p>【ペナルティ】打者が本項に違反した際、投手が投球すれば、球審はその投球によってボールまたはストライクを宣告する。</p> <p>【原注】打者は、思うままにバッターボックスを出入りする自由は与えられていないから、打者が”タイム”を要求しないで、バッターボックスを外したときに、ストライクゾーンに投球されれば、ストライクを宣告されてもやむを得ない。</p> <p>打者が打撃姿勢をとった後、ロジンバッグやパイナールバッグを使用するために、バッターボックスから外に出ることは許されない。ただし、試合の進行が遅滞しているとか、天候上やむを得ないと球審が認めたときは除く。</p> <p>審判員は、投手がwindアップを始めるか、セットポジションをとったならば、打者または攻撃側チームのメンバーのいかなる要求があっても”タイム”を宣告してはならない。たとえ、打者が”目にごみが入った”、“眼鏡がくもった”、“サインが見えなかった”など、その他どんな理由があっても、同様である。球審は、打者がバッターボックスに入ってからでも”タイム”を要求することを許してもよいが、理由なくしてバッターボックスから離れることを許してはならない。球審が寛大にしなければいけないほど、打者はバッターボックスの中にいるのであり、投球されるまでそこにとどまっていなければならないということがわかるだろう。(5.04b 参照)</p> <p>以下はメジャーリーグだけで適応される[原注]の追加事項である。打者がバッターボックスに入ったのに、投手が正当な理由もなく、ぐずぐずしていると球審が判断したときには、打者がほんの僅かの間、バッターボックスを離れることを許してもよい。走者が塁にいるとき、投手がwindアップを始めたり、セットポジションをとった後、打者がバッターボックスから出たり、</p>	<p>5.04 打者 (b) 打者の義務</p> <p>(2) 打者は、投手がセットポジションをとるか、またはwindアップを始めた場合には、バッターボックスの外に出たり、打撃姿勢をやめることは許されない。</p> <p>【ペナルティ】打者が本項に違反した際、投手が投球すれば、球審はその投球によってボールまたはストライクを宣告する。</p> <p>【原注】打者は、思うままにバッターボックスを出入りする自由は与えられていないから、打者が”タイム”を要求しないで、バッターボックスを外したときに、ストライクゾーンに投球されれば、ストライクを宣告されてもやむを得ない。</p> <p>打者が打撃姿勢をとった後、ロジンバッグやパイナールバッグを使用するために、バッターボックスから外に出ることは許されない。ただし、試合の進行が遅滞しているとか、天候上やむを得ないと球審が認めたときは除く。</p> <p>審判員は、投手がwindアップを始めるか、セットポジションをとったならば、打者または攻撃側チームのメンバーのいかなる要求があっても”タイム”を宣告してはならない。たとえ、打者が”目にごみが入った”、“眼鏡がくもった”、“サインが見えなかった”など、その他どんな理由があっても、同様である。球審は、打者がバッターボックスに入ってからでも”タイム”を要求することを許してもよいが、理由なくしてバッターボックスから離れることを許してはならない。球審が寛大にしなければいけないほど、打者はバッターボックスの中にいるのであり、投球されるまでそこにとどまっていなければならないということがわかるだろう。(5.04b 参照)</p> <p style="text-align: center;">(削除)</p> <p>打者がバッターボックスに入ったのに、投手が正当な理由もなく、ぐずぐずしていると球審が判断したときには、打者がほんの僅かの間、バッターボックスを離れることを許してもよい。走者が塁にいるとき、投手がwindアップを始めたり、セットポジションをとった後、打者がバッターボックスから出たり、</p>

<p>打撃姿勢をやめたのにつられて投球を果たせなかった場合、審判員はボークを宣告してはならない。投手と打者との両者が規則違反をしているので、審判員はタイムを宣告して、投手も打者も改めて“出発点”からやり直させる。</p> <p>以下はマイナーリーグで適応される[原注]の追加事項である。走者が塁にいるとき、投手がwindアップを始めたり、セットポジションをとった後、打者が打者席から出たり、打撃姿勢をやめたのにつられて投球を果たせなかった場合、審判員はボークを宣告してはならない。5.04 (b) (4) (A) に抵触する場合、審判員は自動的にストライクを宣告する。</p>	<p>打撃姿勢をやめたのにつられて投球を果たせなかった場合、審判員はボークを宣告してはならない。投手と打者との両者が規則違反をしているので、審判員はタイムを宣告して、投手も打者も改めて“出発点”からやり直させる。</p> <p>以下はマイナーリーグで適応される[原注]の追加事項である。走者が塁にいるとき、投手がwindアップを始めたり、セットポジションをとった後、打者が打者席から出たり、打撃姿勢をやめたのにつられて投球を果たせなかった場合、審判員はボークを宣告してはならない。打者のこのような行為は、バッタースボックスルールの違反として扱い、5.04 (b) (4) (A) に定められたペナルティを適用する。</p>
<p>5.04 打者</p> <p>(b) 打者の義務</p> <p>(4) バッタースボックスルール</p> <p>(A) 打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッタースボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッタースボックスを離れてもよいが、“ホームプレートを囲む土の部分”を出てはならない。</p> <p>(i) 打者が投球に対してバットを振った場合。</p> <p>(ii) チェックスイングが塁審にリクエストされた場合。</p> <p>(iii) 打者が投球を避けてバランスを崩すか、バッタースボックスの外に出ざるを得なかった場合。</p> <p>(iv) いずれかのチームのメンバーが“タイム”を要求し認められた場合。</p> <p>(v) 守備側のプレーヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合。</p> <p>(vi) 打者がバントをするふりをした場合。</p> <p>(vii) 暴投または捕逸が発生した場合。</p> <p>(viii) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分離れた場合。</p> <p>(ix) 捕手が守備のためのシグナルを送るためキャッチャースボックスを離れた場合。</p> <p>打者が意図的にバッタースボックスを離れてプレイを遅らせ、かつ前記(i)～(viii)の例外規定に該当しない場合、《当該試合におけるその打者の最初の違反に対しては球審が警告を与え、その後違反が繰り返されたときにはリーグ会長が然るべき制裁を科す。》</p>	<p>5.04 打者</p> <p>(b) 打者の義務</p> <p>(4) バッタースボックスルール</p> <p>(A) 打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッタースボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッタースボックスを離れてもよいが、“ホームプレートを囲む土の部分”を出てはならない。</p> <p>(i) 打者が投球に対してバットを振った場合。</p> <p>(ii) チェックスイングが塁審にリクエストされた場合。</p> <p>(iii) 打者が投球を避けてバランスを崩すか、バッタースボックスの外に出ざるを得なかった場合。</p> <p>(iv) いずれかのチームのメンバーが“タイム”を要求し認められた場合。</p> <p>(v) 守備側のプレーヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合。</p> <p>(vi) 打者がバントをするふりをした場合。</p> <p>(vii) 暴投または捕逸が発生した場合。</p> <p>(viii) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分離れた場合。</p> <p>(ix) 捕手が守備のためのシグナルを送るためキャッチャースボックスを離れた場合。</p> <p>打者が意図的にバッタースボックスを離れてプレイを遅らせ、かつ前記(i)～(viii)の例外規定に該当しない場合、《当該試合におけるその打者の最初の違反に対しては球審が警告を与え、その後違反が繰り返されたときにはリーグ会長が然るべき制裁を科す。》マイナーリーグでは、当該試合におけるその打者の2度目以降の違反に対して、投手が投球をしなくても球審はストラ</p>

<p>「注」我が国では、所属する団体の規定に従う。</p>	<p>イクを宣告する。この際、ボールデッドで、走者は進塁できない。 「注」我が国では、所属する団体の規定に従う。</p>
<p>5.05 打者が走者となる場合 (b) 打者は、次の場合走者となり、アウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられる。(ただし、打者が一塁に進んで、これに触れることを条件とする。) (1) 審判員が“四球、を宣告した場合。 【原注】 ボール 4 個を得て 1 塁への安全進塁権を得た打者は、一塁へ進んでかつこれに触れなければならない義務を負う。これによって、塁上の走者は次塁への進塁を余儀なくされる。この考え方は、満塁のとき及び代走者を出場させるときにも適用される。 打者への“四球、の宣告により、進塁を余儀なくされた走者が何らかのプレイがあると思いついて塁に触れずにはまた触れてからでも、その塁を滑り越してしまえば、野手に触球されるとアウトになる。また、与えられた塁に触れそくなってその塁よりも余分に進もうとした場合には、身体またはその塁に触球されればアウトになる。</p>	<p>5.05 打者が走者となる場合 (b) 打者は、次の場合走者となり、アウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられる。(ただし、打者が一塁に進んで、これに触れることを条件とする。) (1) 審判員が“四球、を宣告した場合。 【原注】 監督からのシグナルを得て審判員より一塁を与えられた打者を含む、ボール 4 個を得て 1 塁への安全進塁権を得た打者は、一塁へ進んでかつこれに触れなければならない義務を負う。これによって、塁上の走者は次塁への進塁を余儀なくされる。この考え方は、満塁のとき及び代走者を出場させるときにも適用される。 打者への“四球、の宣告により、進塁を余儀なくされた走者が何らかのプレイがあると思いついて塁に触れずにはまた触れてからでも、その塁を滑り越してしまえば、野手に触球されるとアウトになる。また、与えられた塁に触れそくなってその塁よりも余分に進もうとした場合には、身体またはその塁に触球されればアウトになる。</p>
<p>5.06 走者 (b) 進塁 (4) 次の場合、各走者（打者走者を含む）は、アウトにされる恐れなく進塁することができる。 (H) 1 個の塁が与えられる場合——打者に対する投手の投球、または投手板上から走者をアウトにしようと試みた送球が、スタンドまたはベンチに入った場合、競技場のフェンスまたはバックストップを越えるか、抜けた場合。 この際は、ボールデッドとなる。 【規則説明】 投手の投球が捕手を通過した後（捕手が触れたかどうかを問わない）さらに捕手またはその他の野手に触れて、ベンチまたはスタンドなど、ボールデッドになると規定された箇所に入った場合、および投手が投手板上から走者をアウトにしようと試みた送球が、その塁を守る野手を通過した後（その野手が触れたかどうかを問わない）さらに野手に触れて、前記の箇所に入ってボールデッドになった場合、いずれも、投手の投球当時の各走者の位置を基準として、各走者に 2 個の塁を与える。</p>	<p>5.06 走者 (b) 進塁 (4) 次の場合、各走者（打者走者を含む）は、アウトにされる恐れなく進塁することができる。 (H) 1 個の塁が与えられる場合——打者に対する投手の投球、または投手板上から走者をアウトにしようと試みた送球が、スタンドまたはベンチに入った場合、競技場のフェンスまたはバックストップを越えるか、抜けた場合。 この際は、ボールデッドとなる。 【規則説明】 投手の投球が捕手を通過した後（捕手が触れたかどうかを問わない）、ダッグアウト、スタンドなどボールデッドの個所に入った場合、および投手板に触れている投手が走者をアウトにしようと試みた送球が直接前記の個所に入った場合、1 個の塁が与えられる。 しかしながら、投球または送球が、捕手または他の野手を通過した後、プレイングフィールド内にあるボールを捕手または野手が蹴ったり、捕手または野手にさらに触れたりして、前記の個所に入った場合は、投球当時または送球当時の走者の位置を基準として 2 個の塁が与えられる。</p>

<p>5.06 走者 (b) 進塁 (4) 次の場合、各走者（打者走者を含む）は、アウトにされる恐れなく進塁することができる。 (I) 四球目、三振目の投球が、球審か捕手のマスクまたは用具に挟まって止まった場合、1個の塁が与えられる。 ただし、打者の四球目、三振目の投球が（H）及び（I）の状態になっても、打者には一塁が与えられるにすぎない。 【原注1】 走者がアウトにされることなく1個またはそれ以上の塁が与えられたときでも、与えられた塁またはその塁に至るまでの途中の塁に触れる義務を負うものである。 例——打者が内野にゴロを打ち、内野手の悪送球がスタンドに飛び込んだ。打者走者は一塁を踏まないで二塁に進んだ。打者走者は二塁を許されたわけだが、ボールインプレイになった後、一塁でアピールされればアウトになる。 【原注2】 飛球が捕らえられたので元の塁に帰らなければならない走者は、グラウンドルールやその他の規則によって、余分の塁が与えられたときでも投手の投球当時の占有塁のリタッチを果たさなければならない。この際、ボールデッド中にリタッチを果たしてもよい。また、与えられる塁はリタッチを果たさなければならない塁が基準となる。 【注】 打者の四球目または三振目の投手の投球が、（H）項【規則説明】の状態になったときは、打者にも二塁が与えられる。</p>	<p>5.06 走者 (b) 進塁 (4) 次の場合、各走者（打者走者を含む）は、アウトにされる恐れなく進塁することができる。 (I) 四球目、三振目の投球が、球審か捕手のマスクまたは用具に挟まって止まった場合、1個の塁が与えられる。 ただし、打者の四球目、三振目の投球が（H）及び（I）の状態になっても、打者には一塁が与えられるにすぎない。 【原注1】 走者がアウトにされることなく1個またはそれ以上の塁が与えられたときでも、与えられた塁またはその塁に至るまでの途中の塁に触れる義務を負うものである。 例——打者が内野にゴロを打ち、内野手の悪送球がスタンドに飛び込んだ。打者走者は一塁を踏まないで二塁に進んだ。打者走者は二塁を許されたわけだが、ボールインプレイになった後、一塁でアピールされればアウトになる。 【原注2】 飛球が捕らえられたので元の塁に帰らなければならない走者は、グラウンドルールやその他の規則によって、余分の塁が与えられたときでも投手の投球当時の占有塁のリタッチを果たさなければならない。この際、ボールデッド中にリタッチを果たしてもよい。また、与えられる塁はリタッチを果たさなければならない塁が基準となる。 【注】 打者の四球目または三振目の投手の投球が、（H）項【規則説明】後段の状態になったときは、打者にも二塁が与えられる。</p>
<p>5.07 投手 (a) 正規の投球姿勢 投球姿勢には、windアップポジションとセットアップポジションとの二つの正規のものがあり、どちらでも随時用いることができる。 投手は投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。 【原注】 投手がサインを見終わってから投手板を外すことは差し支えないが、外した後にすばやく投手板に踏み出して投球することは許されない。このような投球は、審判員によってクイックピッチと判断される。投手は投手板を外したら、必ず両手を身体の両側に下ろさなければならない。 投手がサインを見終わるたびに投手板を外すことは許されない。</p>	<p>5.07 投手 (a) 正規の投球姿勢 投球姿勢には、windアップポジションとセットアップポジションとの二つの正規のものがあり、どちらでも随時用いることができる。 投手は投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。 【原注】 投手がサインを見終わってから投手板を外すことは差し支えないが、外した後にすばやく投手板に踏み出して投球することは許されない。このような投球は、審判員によってクイックピッチと判断される。投手は投手板を外したら、必ず両手を身体の両側に下ろさなければならない。 投手がサインを見終わるたびに投手板を外すことは許されない。 投手は投球に際して本塁の方向に2度目のステップを踏むことは許されない。塁に走者がいるときには、6.02 (a) によりバークが宣告され、走者がい</p>

<p>5.07 投手</p> <p>(a) 正規の投球姿勢</p> <p>(2) セットアップポジション</p> <p>投手は打者に面して立ち、軸足を投手板に触れ、他の足を投手板の前方に置き、ボールを両手で身体の前方で保持して、完全に動作を静止した時、セットポジションをとったとみなされる。</p> <p>この姿勢から、投手は、</p> <p>①打者に投球しても、塁に送球しても、軸足を投手板の後方（後方に限る）に外してもよい。</p> <p>②打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。</p> <p>セットポジションをとるに際して“ストレッチ”として知られている準備動作（ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう）を行うことができる。しかし、ひとたびストレッチを行ったならば、打者に投球する前に必ずセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、セットポジションをとるに先立って、片方の手を下に下ろして身体の横につけていなければならない。この姿勢から、中断することなく、一連の動作でセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、ストレッチに続いて投球する前には、(a) ボールを両手で身体の前方に保持し (b) 完全に静止しなければならない。審判員は、これを厳重に監視しなければならない。投手は、しばしば走者を塁に釘付けにしようと規則破りを企てる。投手が“完全な静止”を怠った場合には、審判員は、直ちにボークを宣告しなければならない。</p> <p>【原注】走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。</p> <p>しかしながら、投手が打者のすきについて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボールが宣告される。6.02a5【原注】参照。</p>	<p>ないときには、6.02 (b) により反則投球となる。</p> <p>5.07 投手</p> <p>(a) 正規の投球姿勢</p> <p>(2) セットアップポジション</p> <p>投手は打者に面して立ち、軸足を投手板に触れ、他の足を投手板の前方に置き、ボールを両手で身体の前方で保持して、完全に動作を静止した時、セットポジションをとったとみなされる。</p> <p>この姿勢から、投手は、</p> <p>①打者に投球しても、塁に送球しても、軸足を投手板の後方（後方に限る）に外してもよい。</p> <p>②打者への投球に関連する動作を起こしたならば、途中で止めたり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。</p> <p>セットポジションをとるに際して“ストレッチ”として知られている準備動作（ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう）を行うことができる。しかし、ひとたびストレッチを行ったならば、打者に投球する前に必ずセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、セットポジションをとるに先立って、片方の手を下に下ろして身体の横につけていなければならない。この姿勢から、中断することなく、一連の動作でセットポジションをとらなければならない。</p> <p>投手は、ストレッチに続いて投球する前には、(a) ボールを両手で身体の前方に保持し (b) 完全に静止しなければならない。審判員は、これを厳重に監視しなければならない。投手は、しばしば走者を塁に釘付けにしようと規則破りを企てる。投手が“完全な静止”を怠った場合には、審判員は、直ちにボークを宣告しなければならない。</p> <p>【原注】走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。</p> <p>しかしながら、投手が打者のすきについて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボールが宣告される。6.02a5【原注】参照。</p> <p>塁に走者がいるときに、投手が投手板に軸足を並行に触れ、なおかつ自由な足を投手板の前方に置いた場合には、この投手はセットポジションで投球するものとみなされる。</p>
---	--

<p>るか、元のボールを持って正規に投手板に位置すれば、本塁を踏み直すことは許されない。</p> <p>【注4】本項〔規則説明〕は、飛球が捕らえられたときのリタッチが早かった走者にも適用される。</p>	<p>るか、元のボールを持って正規に投手板に位置すれば、本塁を踏み直すことは許されない。</p> <p>【注5】本項〔規則説明〕は、飛球が捕らえられたときのリタッチが早かった走者にも適用される。</p>
<p>5.10 プレーヤーの交代</p> <p>(d) いったん試合から退いたプレーヤーは、その試合には再び出場することはできないが、プレーヤー兼監督に限って、控えのプレーヤーと代わってラインアップから退いても、それ以後コーチスボックスに出て指揮することは許される。</p> <p>守備側チームのプレーヤーが2人以上同時に交代する場合、監督はその代わって出場したプレーヤーが守備位置につく前に、速やかにそれぞれの打撃順に示し、球審はこれを公式記録員に通告しないといけない。</p> <p>球審にただちに通知がなされなかったときは、球審が代わって出場したプレーヤーの打撃順を指定する権限を持つ。</p> <p>【原注】同一イニングでは、投手が一度ある守備位置についたら、再び投手となる以外他の守備位置に移ることはできないし、投手に戻ってから投手以外の守備位置に移ることもできない。</p> <p>投手以外の負傷退場した野手に代わって出場したプレーヤーには、5球を限度としてウォームアップが許される。(投手については、5.07bに規定がある)</p> <p>【注】アマチュア野球では、試合から退いたプレーヤーが、ベースコーチとなることを認めることもある。</p>	<p>5.10 プレーヤーの交代</p> <p>(d) いったん試合から退いたプレーヤーは、その試合に再出場することはできない。すでに試合から退いたプレーヤーが、何らかの形で、試合に再出場しようとしたり、または再出場した場合、球審はその不正に気付くか、または他の審判員あるいはいずれかのチームの監督に指摘されたら、ただちに当該プレーヤーを試合から除くよう監督に指示しなければならない。その指示がプレイの開始前になされたときは、退いたプレーヤーに代わって出場しているべきプレーヤーの出場は認められる。しかし、その指示がプレイの開始後になされたときは、すでに試合から退いているプレーヤーを試合から除くと同時に、退いたプレーヤーに代わって出場しているべきプレーヤーも試合から退いたものとみなされ、試合に出場することはできない。プレーヤー兼監督に限って、控えのプレーヤーと代わってラインアップから退いても、それ以後コーチスボックスに出て指揮することは許される。</p> <p>守備側チームのプレーヤーが2人以上同時に交代する場合、監督はその代わって出場したプレーヤーが守備位置につく前に、速やかにそれぞれの打撃順に示し、球審はこれを公式記録員に通告しないといけない。</p> <p>球審にただちに通知がなされなかったときは、球審が代わって出場したプレーヤーの打撃順を指定する権限を持つ。</p> <p>【原注】同一イニングでは、投手が一度ある守備位置についたら、再び投手となる以外他の守備位置に移ることはできないし、投手に戻ってから投手以外の守備位置に移ることもできない。</p> <p>投手以外の負傷退場した野手に代わって出場したプレーヤーには、5球を限度としてウォームアップが許される。(投手については、5.07bに規定がある)</p> <p>すでに試合から退いているプレーヤーが試合に出場中に起こったプレイは、いずれも有効である。プレーヤーが試合から退いたことを知っていながら再出場したと審判員が判断すれば、審判員は監督を退場させることができる。</p> <p>【注】アマチュア野球では、試合から退いたプレーヤーが、ベースコーチとなることを認めることもある。</p>

<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (b) 守備側の権利優先</p> <p>攻撃側チームのプレーヤー、ベースコーチまたはその他のメンバーは、打球あるいは送球を処理しようとしている野手の守備を妨げないように、必要に応じて自己の占めている場所(ダッグアウト内またはブルペンを含む)を譲らなければならない。</p> <p>走者を除く攻撃側チームのメンバーが、打球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなって、打者はアウトとなり、すべての走者は投球当時に占有していた塁に戻る。</p> <p>走者を除く攻撃側チームのメンバーが、送球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなって、そのプレイの対象であった走者はアウトとなり、他のすべての走者は妨害発生の瞬間に占有していた塁に戻る。</p> <p>【原注】守備側の妨害とは、投球を打とうとする打者を妨げたり、邪魔をする野手の行為をいう。</p> <p>【注1】たとえば、プレーヤーが2本のバットを持って次打者席に入っていたとき、打者がファウル飛球を打ち、これを捕手が追ってきたので、そのプレーヤーは1本のバットを持って場所を譲ったが、捕手は取り残されたバットにつまずいたために、容易に捕らえることができたはずのファウル飛球を捕らえることができなかったような場合、プレーヤーの取り残したバットが、明らかに捕手の捕球を妨げたと審判員が判断すれば、打者はアウトになる。</p> <p>【注2】例——打者が遊撃手にゴロを打ち、それを捕った遊撃手が一塁に悪送球した。一塁ベースコーチは送球に当たるのを避けようとしてグラウンドに倒れ、悪送球を捕りに行こうとした一塁手と衝突した。打者走者は三塁まで到達した。妨害を宣告するかどうかは審判員の判断による。コーチが妨害を避けようとしたが避けきれなかったと判断すれば、妨害を宣告してはならない。</p>	<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (b) 守備側の権利優先</p> <p>攻撃側チームのプレーヤー、ベースコーチまたはその他のメンバーは、打球あるいは送球を処理しようとしている野手の守備を妨げないように、必要に応じて自己の占めている場所(ダッグアウト内またはブルペンを含む)を譲らなければならない。</p> <p>走者を除く攻撃側チームのメンバーが、打球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなって、打者はアウトとなり、すべての走者は投球当時に占有していた塁に戻る。</p> <p>走者を除く攻撃側チームのメンバーが、送球を処理しようとしている野手の守備を妨害した場合は、ボールデッドとなって、そのプレイの対象であった走者はアウトとなり、他のすべての走者は妨害発生の瞬間に占有していた塁に戻る。</p> <p>【原注】守備側の妨害とは、投球を打とうとする打者を妨げたり、邪魔をする野手の行為をいう。</p> <p>【注】たとえば、プレーヤーが2本のバットを持って次打者席に入っていたとき、打者がファウル飛球を打ち、これを捕手が追ってきたので、そのプレーヤーは1本のバットを持って場所を譲ったが、捕手は取り残されたバットにつまずいたために、容易に捕らえることができたはずのファウル飛球を捕らえることができなかったような場合、プレーヤーの取り残したバットが、明らかに捕手の捕球を妨げたと審判員が判断すれば、打者はアウトになる。</p> <p>6.01 (d) 【原注】の末尾に移動</p>
<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (d) 競技場内に入ることを公認された人の妨害</p> <p>競技場内に入ることを公認された人(試合に参加している攻撃側メンバー、またはベースコーチ、そのいずれかが打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合、あるいは審判員を除く)が競技を妨害したとき、その妨害が故意でないときは、ボールインプレイである。</p>	<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (d) 競技場内に入ることを公認された人の妨害</p> <p>競技場内に入ることを公認された人(試合に参加している攻撃側メンバー、またはベースコーチ、そのいずれかが打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合、あるいは審判員を除く)が競技を妨害したとき、その妨害が故意でないときは、ボールインプレイである。</p>

<p>しかし故意の妨害のときには、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。(4.07a 参照)</p> <p>【原注】本項で除かれている攻撃側メンバーまたはベースコーチが、打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合については、6.01 (b) 参照、審判員による妨害については5.06 (c) (2)、同(6)および5.05 (b) (4)、走者による妨害については5.09 (b) (3) 参照。</p> <p>妨害が故意であったか否かは、その行為に基づいて決定しなければならない。</p> <p>たとえば、バットボーイ、ボールボーイ、警察官などが、打球または送球に触れないように避けようとしたが避けきれずに触れた場合は、故意の妨害とはみなされない。しかしボールをけったり、拾い上げたり、押し戻した場合には、本人の意思とは関係なく故意の妨害とみなされる。</p>	<p>しかし故意の妨害のときには、妨害と同時にボールデッドとなり、審判員は、もし妨害がなかったら競技はどのような状態になったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。(4.07a 参照)</p> <p>【原注】本項で除かれている攻撃側メンバーまたはベースコーチが、打球または送球を守備しようとしている野手を妨害した場合については、6.01 (b) 参照、審判員による妨害については5.06 (c) (2)、同(6)および5.05 (b) (4)、走者による妨害については5.09 (b) (3) 参照。</p> <p>妨害が故意であったか否かは、その行為に基づいて決定しなければならない。</p> <p>たとえば、バットボーイ、ボールボーイ、警察官などが、打球または送球に触れないように避けようとしたが避けきれずに触れた場合は、故意の妨害とはみなされない。しかしボールをけったり、拾い上げたり、押し戻した場合には、本人の意思とは関係なく故意の妨害とみなされる。</p> <p>例——打者が遊撃手にゴロを打ち、それを捕った遊撃手が一塁に悪送球した。一塁ベースコーチは送球に当たるのを避けようとしてグラウンドに倒れ、悪送球を捕りに行こうとした一塁手と衝突した。打者走者は三塁まで到達した。妨害を宣告するかどうかは審判員の判断による。コーチが妨害を避けようとしたが避けきれなかったと判断すれば、妨害を宣告してはならない。</p>
<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (h) オブストラクション</p> <p>オブストラクションが生じたときには、審判員は“オブストラクション”を宣告するか、またはそのシグナルをしなければならない。</p> <p>(1) 走塁を妨げられた走者に対しプレイが行われている場合、または打者走者が一塁に触れる前にその走塁を妨げられた場合には、ボールデッドとし、塁上の各走者はオブストラクションがなければ達しただろうと審判員が推定する塁まで、アウトの恐れなく進塁することが許される。</p> <p>走塁を妨げられた走者は、オブストラクション発生当時すでに占有していた塁よりも少なくとも1個先の進塁が許される。</p> <p>走塁を妨げられた走者が進塁を許されたために、塁を明け渡さなければならなくなった前位の走者(走塁を妨げられた走者より)は、アウトにされるおそれなく次塁へ進むことが許される。</p> <p>【付記】捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線(ベースライン)は走者の走路であるから、捕手は、</p>	<p>6.01 妨害・オブストラクション・本塁での衝突プレイ (h) オブストラクション</p> <p>オブストラクションが生じたときには、審判員は“オブストラクション”を宣告するか、またはそのシグナルをしなければならない。</p> <p>(1) 走塁を妨げられた走者に対しプレイが行われている場合、または打者走者が一塁に触れる前にその走塁を妨げられた場合には、ボールデッドとし、塁上の各走者はオブストラクションがなければ達しただろうと審判員が推定する塁まで、アウトの恐れなく進塁することが許される。</p> <p>走塁を妨げられた走者は、オブストラクション発生当時すでに占有していた塁よりも少なくとも1個先の進塁が許される。</p> <p>走塁を妨げられた走者が進塁を許されたために、塁を明け渡さなければならなくなった前位の走者(走塁を妨げられた走者より)は、アウトにされるおそれなく次塁へ進むことが許される。</p> <p>【付記】捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線(ベースライン)は走者の走路であるから、捕手は、</p>

<p>まさに送球を捕ろうとしているか、送球が直接捕手に向かってきており、しかも十分近くにきていて、捕手がこれを受け止めるにふさわしい位置を占めなければならないとなったときか、すでにボールを持っているときだけしか、塁線上に位置することができない。この規定に違反したとみなされる捕手に対しては、審判員は必ずオブストラクションを宣告しなければならない。</p>	<p>まさに送球を捕ろうとしているか、送球が直接捕手に向かってきており、しかも十分近くにきていて、捕手がこれを受け止めるにふさわしい位置を占めなければならないとなったときか、すでにボールを持っているときだけしか、塁線上に位置することができない。</p> <p style="text-align: right;"><u>削除</u></p>
<p>6.02 投手の反則行為 (c) 投手の禁止事項 (9) 打者を狙って投球すること。このような反則行為が起きたと審判員が判断したときには、審判員は次のうちのいずれかを選ぶことができる。 (A) その投手またはその投手とそのチームの監督とを試合から除く。 (B) その投手と両チームの監督に、再びこのような投球が行われたら、その投手（またはその投手の後に出場した投手）と監督を退場させる旨の警告を発する。 審判員は、反則行為が起きそうな状況であると判断したときには、試合開始前、あるいは試合中を問わず、いつでも両チームに警告を発することができる。 リーグ会長は、8.04 に規定された権限によって、制裁を加えることができる。 【原注】</p> <p>打者を狙って投球することは、非スポーツマン的である。特に頭を狙って投球することは、非常に危険であり、この行為は許されるべきではない。審判員はちゅうちょなく、本項を厳格に適用しなければならない。</p>	<p>6.02 投手の反則行為 (c) 投手の禁止事項 (9) 打者を狙って投球すること。このような反則行為が起きたと審判員が判断したときには、審判員は次のうちのいずれかを選ぶことができる。 (A) その投手またはその投手とそのチームの監督とを試合から除く。 (B) その投手と両チームの監督に、再びこのような投球が行われたら、その投手（またはその投手の後に出場した投手）と監督を退場させる旨の警告を発する。 審判員は、反則行為が起きそうな状況であると判断したときには、試合開始前、あるいは試合中を問わず、いつでも両チームに警告を発することができる。 リーグ会長は、8.04 に規定された権限によって、制裁を加えることができる。 【原注】 チームのメンバーは、本項によって発せられた警告に対し抗議したり、不満を述べたりするためにグラウンドに出てくることはできない。もし監督、コーチまたはプレーヤーが抗議のためにダッグアウトまたは自分の場所を離れば、警告が発せられる。警告にもかかわらず本塁に近づけば、試合から除かれる。 打者を狙って投球することは、非スポーツマン的である。特に頭を狙って投球することは、非常に危険であり、この行為は許されるべきではない。審判員はちゅうちょなく、本項を厳格に適用しなければならない。</p>
<p>9.14 四球・故意四球</p>	<p>9.14 四球・故意四球 (d) 守備側チームの監督が故意四球とする意思を球審に示して、打者が一塁を与えられたときには、故意四球が記録される。</p>
<p>本規則における用語の定義 7 BASE ON BALLS「ベースオンボールス」(四球) —— 打者が攻撃中にボール4個を得て、一塁へ進むことが許される裁定である。</p>	<p>本規則における用語の定義 7 BASE ON BALLS「ベースオンボールス」(四球) —— 打者が攻撃中にボール4個を得るか、守備側チームの監督が打者を故意四球とする意思を審判員に示</p>

	<p>し、一塁へ進むことが許される裁定である。守備側チームの監督が審判員に故意四球の意思を伝えた場合（この場合はボールデッドである）、打者には、ボール4個を得たときと同じように、一塁が与えられる。</p>
<p>本規則における用語の定義 38 ILLEGAL PITCH「イリーガルピッチ」（反則投球）——（1）投手が、投手板に触れないで投げた打者への投球、（2）クイックリターンピッチ、をいう。—— 走者が塁にいるときに反則投球をすれば、ボークとなる。 【注】投手が5.07（a）（1）および（2）に規定された投球動作に違反して投球した場合も、反則投球となる。</p>	<p>本規則における用語の定義 38 ILLEGAL PITCH「イリーガルピッチ」（反則投球）——（1）投手が、投手板に触れないで投げた打者への投球、（2）クイックリターンピッチ、をいう。—— 走者が塁にいるときに反則投球をすれば、ボークとなる。</p> <hr/> <p style="text-align: center;">削除</p>